稲作重要情報

JA秋田しんせい 営農生活部 米穀課

発信日：平成31年2月
TEL：27-1601

単収確保に向けて《第一弾》

2年連続の収量減を繰り返さないように、各自の栽培見直しが必要と考えられます。

まずは第一段階として初期生育確保のため、下記のチェックポイントに着目し改善を図って下さい。

単収確保に向けた重点実施事項

◎老化苗を移植しないように播種日・播種量を設定しよう！

○老化苗を移植することにより活着に時間がかかりやすくなりますので移植日に合わせて播種日・播種量を設定しましょう。
○極端な厚播を行うと、苗の老化が早まりますので、育苗期間に注意しましょう。
○田植作業は日平均気温で14℃以上、日中最高気温20℃以上の日に移植を行いましょう。

チェックポイント		生育への影響		対応策
苗質は問題なかったか	⇒	苗質が軟弱だったり老化苗を移植するとその後の活着に影響がでる。	⇒	健苗育成を行うために育苗期間を見直し、乾籾130～150g/箱の播種量で27日以内、乾籾100～110g/箱の播種量で32日以内を目安とする。 老化苗になる前に田植を行うようにする。

◎施肥設計の見直しをしよう！

○気象の影響だけでなく、基肥窒素不足と見られる圃場や出穂期まで葉色維持ができていない圃場が見られますので、基肥の増施や栄養診断を行い追肥を検討しましょう。

チェックポイント		生育への影響		対応策
基肥は適性量投入されているか	⇒	基肥投入量が不足気味だとその後の生育に影響がでる。	⇒	基肥窒素（速効性肥料）を20%～30%増施を行う

※基肥増施の参考例（10aあたり）

肥料名	H30	⇒	H31
エコエコ500	現物30kg（N成分4．5kg）		現物36～40kg（N成分5．4～6．0kg）
アグリフラッシュ444	現物32kg（N成分4．5kg）		現物39～43kg（N成分5．5～6．0kg）

○緩効性肥料の使用上の注意点

基肥まくもん、ハイセラN25等の緩効性コーティング肥料については、全層で使用すると被覆に傷がつき、肥効の出方が一定でなくなるため栄養診断による追肥の判断が必要となる。

チェックポイントを点検し
該当する対応策を実施しましょう。